

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	高津 秀之
論文題目	ドイツ近世都市ケルンの共和主義 —ヘルマン・ヴァインスベルクの回想録にみる参事会と市民の政治的対話—

### 審査要旨

#### 1. 本論文の概要

本論文はドイツ近世都市ケルンを研究対象として、ハインツ・シリングの提起した「共和主義」論を踏まえ、16・17世紀における参事会と市民の政治的対話を主題として、参事会の統治と市民の市政参加の諸相を参事会員ヘルマン・ヴァインスベルク(1518-1597)の回顧録を中心に解明したものである。その構成は、序章、第Ⅰ部、第Ⅱ部、終章からなり、末尾に図表・画像・年表、参考文献が付されている。

対象となるケルンは、ライン下流域の最も繁栄する商工業の中心地で、中・近世ヨーロッパの最大級の都市であり、中世後期には手工業者が市政参加を求め、1396年には有名な「ガッフェル」体制(ツunft市制)が確立した都市であった。このドイツを代表する都市ケルンの近世を分析するのが本論文である。ところでドイツ近世都市の研究は、宗教改革研究と結びついて進展したが、H・シリングは近世都市の特徴として「共和主義」を挙げ、その内容として、対外的には都市の自治、対内的には、4つの構成要素—(1)個人の基本権・自由権、(2)都市住民の負担と義務の平等、(3)ゲノッセンシャフト的団体の市政参加、(4)市民の政治エリートたちによる寡頭政的かつ平等主義的統治構造—を指摘した。さらに O・ブルンナー、M・グローテンらは、中・近世都市が参事会と市民の二元的権力構造をもち、参事会の統治は、市民が対話に基づきその正当性に合意を与える形で機能していたことを明らかにした。申請者はこれらの先行研究を踏まえて、序章で、近世都市ケルンの「共和主義」の「継承」と新たな「転換」を問題として設定する。

続く本論は二部からなり、第Ⅰ部「近世都市の『合意に基づく参事会統治』」では第1章でケルンのガッフェル体制と参事会の統治を概観し、第2章で祝祭「森への行進」、対トルコ税とワイン税の徴収を例として参事会と市民の政治的対話を具体的に示し、第3章では参事会員ヘルマン・ヴァインスベルクの生涯と経歴、回顧録の執筆、名誉意識と行動を明らかにする。第Ⅱ部「共和主義の『継承』と『転換』」では、第4章で宗派对立の激化と「ケルン戦争」に伴う1583年の軍制改革、「にせ巡礼」と放浪者取り締まり、第5章で1608-1610年のケルンの都市騒擾、第6章で法律顧問官と大学出身者の活躍をとりあげ、16世紀後半に始まる都市の二元的権力構造の変化、参事会と市民の政治的対話の停滞、新旧政治エリートの抗争、外交と秘密保持、市民の意識の変化と参事会員選挙の意義を論ずる。

終章では本論文の成果をまとめ、近世都市ケルンでは16世紀後半以降参事会と市民の政治的対話が停滞し、市民の市政参加が制限されたが、それは危機的状況における二元的権力構造の変化、外交の活発化、学識者の進出によるものであり、市民たちは消極的、積極的な合意を与え、参事会員の選挙を通じて「学者の統治する共和政」の確立を促し、共和主義の歴史における「継承」と「転換」の両側面がみられたと結論づける。

#### 2. 本論文の評価

第一に、なによりも評価すべきは、ヘルマン・ヴァインスベルクの回顧録という、分量・内容ともに豊かで希少な史料に長年取り組み、その他多数の刊行・未刊行史料と文献を合わせて検討して主題である「参事会と市民の政治的対話」による「合意形成」の実際と市政の展開をケルンについて如実に解明した点である。とりわけこの参事会員自身を対象とした第3章は、その名誉意識と行動を見事に浮き彫りにしている。

第二に、中・近世都市史の研究動向を適切に把握し、近世都市ケルンにおける16世紀後半の参事会と市民の二元的権力構造の変化を明らかにしたことが評価できる。申請者は、1583年の軍制改革の諸要因、新たな軍事組織とその活動、「外交の内政に対する優位」と「学識者の進出」を論じ、他方で17世紀初頭の有力な樽工ガッフェルに

よる都市騒擾をとりあげ、「同盟文書」(1396年)、「改訂文書」(1513年)と「市制概要」(1610年)を比較して、この事件が「六人衆」の寡頭政に反抗する新興の政治エリートの闘争であったことを明らかにした。またケルンでは、職人や下層民をも含め市民・住民全員が加入するガッフェル体制が、1796年のフランス革命軍による参事会の廃止まで存続し、参事会と市民の積極的・消極的な「合意形成」を支えたが、この制度が参事会と市民との対話の装置として重要であったという申請者の指摘は、きわめて妥当であるといえよう。

第三に、本論文は政治史、政治文化論の斬新な研究であるが、主題の考察には、その背景となる経済史・商業史の研究成果のいっそうの援用が望まれる。ケルン都市経済の盛衰に伴う、都市騒擾の要因としての租税と財政、ガッフェルの多様化とその体制の存続、宗派对立とネーデルラント移住民の受け入れと排斥などがその事例である。申請者は今後の展望として、帝国都市ケルンの「外交」の実態解明を課題として挙げているが、それだけでなく、ドイツの他の帝国都市やイタリア、スイス、ネーデルラントの自治都市との比較や、マキアヴェッリやエラスムスなど人文主義者の言説を踏まえた近世都市の共和主義や近世国家論との比較検討を行うことも期待したい。いずれにせよ本論文は、ドイツ近世都市史、そしてヨーロッパ都市史の研究に大きく貢献するものといえ、博士(文学)の学位に値するものと判断する。

公開審査会開催日	2012年5月12日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	甚野 尚志
審査委員	早稲田大学文学学術院・名誉教授	博士(文学)早稲田大学	小倉 欣一
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授		大内 宏一
審査委員	武蔵大学・教授	博士(文学)早稲田大学	踊 共二